

『フェンスレス』オンライン版（第三号） ● 特別付録 資料1

---

総目次 『実録文学』（文学案内社）

- 一、雑誌名に添えた年号は創刊および終刊をあらわす。
- 一、細目は目次からではなく本文から採ることを原則とした。また、副題も採ることを原則とした。
- 一、仮名遣いは原文のままとし、旧漢字は新漢字に改めた。
- 一、作品のジャンルについて、\*印を付して題名下の( )内に説明を加えた。「実録文学」の性質上、小説・随筆・評論の境界は曖昧だが、可能な限り腑分けした。
- 一、作品に執筆年月日などが付されている場合のみ、「摺筆」として本文のままに注記した。
- 一、広告のうち、文学・演劇・映画に関するものだけは内容を注記した。
- 一、著者名の下段の数字はページ数をあらわしている。
- 一、注の引用で/印は改行を意味する。
- 一、「創刊の挨拶」と「編集後記」のうちで、特に意味があると思われる記述は、一部または全文を注記した。
- 一、体裁の模範として、『現代日本文芸総覧』（明治文献、一九六九—一九七四年）を参照した。

# 『実録文学』

\*注

昭和十年十月—昭和十一年四月（全六号）

## 第一卷第一号

昭和十年十月号 一日発行

—十月創刊号—

### 〔表紙〕

〔広告〕 \*注2

〔広告〕 \*注3

### 〔目次〕

〔広告〕 \*注4

創刊の挨拶（\*巻頭言） \*注5

江戸時代実録小説の分析（\*評論） \*注6 田村栄太郎 二—二〇

郷土史家に告ぐ 実録文学研究会 二—

実録文学（\*時評） 二二—二三

わが自叙実録（\*随筆） \*注7 戸川 貞雄 二四—二七

鷗外さんの態度その他（\*随筆） 木村 毅 二七—二八

森鷗外の実録文学（\*評論） \*注8 植村 清二 二九—三五

目撃せざる実録 一千兩首のすげ替へ—文壇御歴々が文芸懇話会賞当

選者島木健作氏を闇から闇に葬るまで—

成田 仁平 三六—三八

文壇・実録非実録 ゴシップ 三九、四四—四七、五九

—「偶然性」は借りもの、トンチンカン、夫婦喧嘩の妙薬、〇ヒマシ

油とヘマシ油、梢風老牧の墓参り、川口松太郎自祝の会、忠犬マイの

死—

実録 監獄部屋物語（一）（\*評論）

大島浪太郎 四〇—四三

吉川英治氏との「実録」問答

笹本 寅 四四―四七

実録小説 椒村\*注9

左山英太郎 四八―五八

極楽悲憤図―直木三十五と牧逸馬の対話―

X・Y・Z 六〇―六二

農民・強盗・格闘資料

田村栄太郎 六三

国際潜行戦実話 モンテ・カルロの陰謀（\*小説）

早坂 二郎 六四―六七

実録小説 桂小五郎潜行記

貴司 山治 六八―九四

実録小説 森田節斎

岩崎 栄 九五―一〇五

同人語

一〇六―一一一

―超事実の事実（海音寺潮五郎）、実録小説と芸術小説（貴司山治）、バラックの建直しを（戸川貞雄）\*注10、面白さの問題（片岡貢）、貴司君の手紙（笹本寅）、古い皮袋（大津恒吉）、実録小説の対話（田村栄太郎）―

実録文学研究会の趣意書 一一二―一一五

編集後記\*注11

笹本・片岡 一一六

〔広告〕\*注12

〔裏表紙〕\*注13

## 注

- \*注1 発行編集兼印刷人―笹本寅（全号）／発行所―実録文学研究会（全号）／発売所―文学案内社（全号）／実録文学研究会同人―岩崎栄・海音寺潮五郎・片岡貢・木村毅・貴司山治・笹本寅・田村栄太郎・戸川貞雄・植村清二（全号）、大津恒吉（二巻一号―二号）、丸尾長頭・高木哲（一巻三号―二巻四号）

\*注2 労働雑誌社『労働雑誌』昭和十年十月号

\*注3 文学案内社『文学案内』昭和十年十月号

\*注4 文学案内社『詩人』創刊予告

\*注5 「大分方々から期待されてゐた『実録文学』をいよ／＼創刊する。四角ばつた趣意書は巻末に附した『実録文学研究会趣意書』についてみてもらひたい。たゞ／＼と言、諸方への御挨拶代りに、ことはつておきたいことは、われ／＼同人は大いに困結してこれから実録文学を世の中へ押し出して行くのであるが、同人各個人はもと／＼至つて自由な立場に立つてゐる。思想的には―大きくいふと世界観の上では―必ずしも一致してゐるわけではない。又必ずしもそんな必要もないのである。／＼われ／＼はたゞ現在の卑俗低級な大衆文学とたゞかひ、この方面における文学を本来の高さに引き上げる仕事として、実録文学を提唱し、これを社会的に実行するといふ点で、一致してゐるのである。だから同人木村毅は実録文学研究会をガラスの家とよんだが、これは「名言」である。ガラスの家は叩きこはせばこはれる。しかし、使はずにほつておけば鉄の家だとてさびてしまふ。ガラスの家は、使つても、（使はなくても、か／＼さびたり、くさつたりしない点では、鉄の家よりも強いのである。―とこれで創刊の挨拶といふことになつたかな。」

\*注6 「附記」に「まだ述べるところが多くあるけれ共、すでに予定の紙数を超過したから擱筆する、一部分は『文学案内』に掲載するから参照せられたい」とある。

\*注7 擱筆―（八月末）

\*注8 擱筆―（三五・九・五）。三五頁にレンカ・フォン・ケ

ルバア著・大下晋平訳『ソヴェト刑務所物語』(現代文化社)の  
広告有り。

\*注9 五八頁に貴司山治作・村山知義演出『石田光成・四幕八  
場』(新協劇団一周年記念大公演・築地小劇場)の広告有り。

\*注10 擱筆―(八月末)

\*注11 「▼本誌は勿論研究会の機関誌であり同人雑誌ではある  
が、実録文学の発展の為には喜んで外部に対して門戸を開かう  
とするものであるから、志を同うする人々は凡ゆる意味に於い  
て本誌なり研究会なりに対し後援を惜しまないやうに御願ひす  
る。特に本文中に掲げてある通り全国の郷土史料研究家に向  
つては我々は進んで手をさし伸ばし郷土にかくれたる史料や実  
録を本誌に依つて広く世間に紹介したい。さういふ意味で本誌  
を利用されることは我々「二字脱字」衷心からの希望である。ど  
し／＼さういふ原稿をお送り願ひたいと思ふ(片岡)とある。

\*注12 ナウカ社―『文学評論』昭和十年十月号・『小林多喜二書  
簡集』

\*注13 貴司山治『戯曲 石田三成』(文学案内社)の広告。

## 第一巻第二号 昭和十年十一月号 一日発行

〔表紙〕

〔広告〕 \*注1

〔広告〕 \*注2

〔目次〕

〔広告〕 \*注3

〔内表紙〕

歴史とリアリズム (\*評論)

郷土史家に告ぐ

実録文学 (\*時評)

実録文学読本(二) 徳川幕府の職制と旗本生活(一) (\*評論) \*注4

資料 久離除帳とその廃止

白井喬二氏との「実録問答

文壇・実録非実録

―もとの木阿弥、青野季古武勇譚、判じもの流行、新商売往来―

吉川英治氏への手紙

明治四年の芸者の戸籍 (\*資料)

西洋最近の実録文学 (\*評論)

大前田栄五郎伝―「近世上毛偉人伝より」― (\*資料)

千葉さんと実録文学 (\*随想)

実録 監獄部屋物語(2) (\*評論)

現代実録 南硫黄島 (\*小説)

祇園・島原 (\*随筆)

辞世伝―一休禪師とレーニン

ピエル・ロチの「お菊さん」を解剖する (\*評論) \*注5

実録小説 意地

実録小説 桂小五郎潜行記(完結) \*注6

実録小説 森田節斎

片岡 貢 二―八

実録文学研究会 九

一〇―一一

田村栄太郎 一二―二二

二二三

笹本 寅 二四―二八

二四―二七、四二

片岡 貢 二八

田村栄太郎 二九

木村 毅 三〇―三七

田村栄太郎 三八―三九

木村 毅 四〇―四二

大島浪太郎 四三―四六

戸川 貞雄 四七―五三

中山 忠温 五四―五六

五六

永見徳太郎 五七―六六

海音寺潮五郎 六七―七九

貴司 山治 八〇―九七

岩崎 栄九 八一―〇八

同人語

—日記から(戸川貞雄) \*注7、武士道の原型(海音寺潮五郎)、「葉隠」について(笹本寅) —

実録文学研究会の趣意書

編集後記

〔広 告〕 \*注8

〔裏表紙〕 \*注9

M生

一〇九—一一二  
一一三—一一六  
一一六

注

\*注1 吉川弘文館「宮内省蔵版」殉難録稿」

\*注2 文学案内社「文学案内」昭和十年十一月号

\*注3 文学案内社「貴司山治」戯曲 石田三成」

\*注4 一二二頁に『星座』昭和十年十一月号(本間三陽堂書店)の広告有り。

\*注5 「末記」として、彭城貞徳、内田栄四郎、中村重嘉、野上豊一郎、渡瀬守太郎、永見豊次郎、永見倉太、松森多つ諸氏に教へを受けた点を此処に述べて謝意を表します」とある。

\*注6 九七頁に「葉隠」(巻十)より」と題した埋草有り。

\*注7 擱筆—(十月三日)

\*注8 ナウカ社「文学評論」昭和十年十一月号

\*注9 野淵昶監督『白牡丹』(原作—左八阪、千恵プロ)、田中重雄監督

『喘ぐ白鳥』(原作—加藤武雄、新興キネマ高田プロ)の広告。

第一卷第三号

昭和十年十二月号 一日発行

〔表紙〕

〔広 告〕 \*注1

〔広 告〕 \*注2

〔目次〕

〔広 告〕

〔内表紙〕 \*注3

ゴルキーと実録文学(\*評論)

実録文学読本(二) 徳川幕府の職制と旗本生活(一)(\*評論)

郷土史家に告ぐ

実録文学(\*時評)

実録 監獄部屋物語(3)(\*評論) \*注4

資料 敲の刑

乾窓漫筆(\*随筆) \*注5

大衆文学時評

一つの実録—四十年目に判つた名主三人殺しについて—(\*評論) \*注6

資料 目明し賞与と出張費用

資料 死馬捨囚人護送

資料 信濃中間内職欠落

婦人文化揺籃 明治女学校を語る(\*座談会) \*注7

出席者—青柳はるよ・稲垣吟・片岡鑑・三宅花園・乗竹ろく・相馬

黒光、司会—神崎清

座談会を終へて

木村鏡子小伝の序 島田三郎誌(\*資料)

K・M生 七〇

神崎 清 六九

実録小説 二葉亭四迷と乃木石林將軍 木村 毅 七一―八二

実録小説 西郷の齒<sup>\*注8</sup> 戸川 貞雄 八三―八六

実録長篇小説 森田節齋 (第二回)<sup>\*注9</sup> 岩崎 栄 八七―九八

同人語 九九―一〇三

―伝奕史大観(田村栄太郎)、平塚だより(戸川貞雄)<sup>\*注10</sup>、田村栄

太郎の近什「歴史の真実を衝く」(中山忠温)、寸言(木村毅)―

編集後記 高木 一〇四

〔広告〕

〔裏表紙〕<sup>\*注11</sup>

### 注

\*注1 吉川弘文館―宮内省蔵版『殉難録稿』

\*注2 文学案内社―徳永直『逆流に立つ男』

\*注3 扉カッパ絵―熊谷登久平

\*注4 二二頁に『実録文学』次号予告有り。

\*注5 二七頁に『テアトロ』昭和十一年一月号(テアトロ社)の広告有

り。

\*注6 三八頁にゲーテ作・久保田栄訳演出『ファウスト』(新協劇団一

月公演、築地小劇場)および、貴司山治作『石田三成』他一幕物(新

協劇団西日本巡回公演)の広告有り。

\*注7 昭和十年十月二十七日、於新宿中村屋。

\*注8 摺筆―(十年十一月作)

\*注9 目次では「第三回」と表記。

\*注10 摺筆―(十年十一月初旬)

\*注11 『添削本位 俳句講座』(日本俳句研究会)の広告。

## 第二巻第一号 昭和十一年一月号 一日発行

〔表紙〕

〔広告〕<sup>\*注1</sup>

〔目次〕

〔広告〕

〔内表紙〕<sup>\*注2</sup>

新聞小説論―卑俗な、ほんの少々卑俗な―<sup>\*注3</sup>

戸川 貞雄 二一―一〇

郷土史家に告ぐ 実録文学研究会 一一

実録文学本説(三) 徳川幕府の職制と旗本生活(三)(<sup>\*注4</sup>評論)

田村栄太郎 一一―二二

実録文学(<sup>\*注5</sup>時評) 田村栄太郎 二二―二三

資料 時刻 田村栄太郎 二四

鳶魚翁百話(一)(<sup>\*注6</sup>随筆) 笹本 寅 二五―二九

実録 監獄部屋物語(四)(<sup>\*注7</sup>評論) 大島浪太郎 三〇―三三

大衆文学時評<sup>\*注8</sup> 西 大助 三四―四五

村松梢風氏と「実録」問答 笹本 寅 四六―五五

実録 明治四十年代に於けるサガレンの邦人娼婦雑考―国境突破者の

実録から―(<sup>\*注9</sup>評論) <sup>\*注5</sup> 伝法谷英丸 五六―五八

公判記録より見たる高橋お伝(<sup>\*注10</sup>伝記) 瀬戸 寅雄 五八―六四

実録 江島生島考(<sup>\*注11</sup>評論) 池田孝次郎 六五―六九

実録文学と郷土史文献<sup>\*注6</sup>

庄司生 六九—七〇

大衆文学辻斬り―嘘と講談つぎはぎの吉川英治―<sup>(＊評論)</sup> <sup>\*注7</sup>

一藤 龍潭 七一—七六

同人語

七七—七九

―相馬子爵の死体と高橋お伝の皮膚―江口渙氏の『向日葵の書』を読む

―(貴司山治)、二葉亭の陰影―神崎清君に答へる―(木村毅)―

故豊田薫年譜

八〇

故豊田薫君を追悼する<sup>\*注8</sup>

八一—九四

―老成の一面(上泉秀信)、豊田薫君の回想(杉山平助)、豊田君

を憶ふ(細田源吉)、豊田薫と僕(川辺確治)、豊田薫後援会(新

延修三)、生きてゐる彼(飛田角一郎)、『課長さんの死』(中村地

平)、彼と僕と(丸山義二)、豊田君追悼(笹本寅)、チョンボの大

家(片岡貢)―

乾怒漫筆<sup>(二)</sup>(＊随筆)

海音寺潮五郎 九五—九九

痛ましき記録―松村亥太君のこと―<sup>(＊随想)</sup> <sup>\*注9</sup>

笹本 寅 九八—一〇六

贋金づくり(＊小説)

片岡 貢 一〇七—一四

間宮林蔵(＊小説)

貴司 山治 一一五—一二五

森田節斎(第四回)(＊小説)

岩崎 栄 一二六—一四三

編集後記

笹本・高木 一四四

〔広 告〕<sup>\*注10</sup>

〔裏表紙〕<sup>\*注11</sup>

注

\*注1 吉川弘文館―宮内省蔵版『殉難録稿』

\*注2 扉カッパ絵 熊谷登久平

\*注3 摺筆―(十年・十二月)

\*注4 四五頁に『葉隠』(巻十二)より」と題した埋草有り。

\*注5 摺筆―(昭和十年十一月十日)

\*注6 七〇頁に『実録文学』次号予告有り。

\*注7 七六頁に『葉隠』(巻十二)より」と題した埋草有り。

\*注8 九四頁に『葉隠』(巻二)より」と題した埋草有り。

\*注9 摺筆―(十二月十三日記)。一〇六頁に『葉隠』(巻七)より」と題した埋草有り。

\*注10 日本俳句研究会―『添削本位 俳句講座』

\*注11 熊谷久虎監督『情熱の詩人啄木』(原案脚色―小田喬、日活)、

内田叶夢監督『人生劇場』(原作―尾崎士郎、日活)の広告。

第二巻第二号

休刊<sup>\*注1</sup>

注

\*注1 第二巻第三号の『編集後記』に二月号は、同人一同の殆どが感冒

にやられ、辛じて集め得た原稿は、印刷所の争議のために遂に期

日に間に合はず事が出来ず、遂に休刊するの已むなきに至つた

(高木)とある。また、第二巻第一号に掲載の次号予告によると、

本号は『明治史研究号』と題し、巻頭論文(植村清二)、大衆文学

読本(五)(田村栄太郎)、鳶魚百話(二)(笹本寅)、明治史研

究(田村栄太郎・木村毅・海音寺潮五郎・笹本寅・柳田泉・江

口渙・戸川貞雄・片岡貢・岩崎栄)、小説として、青空(笹本寅)、

間宮林蔵(貴司山治)、題未定(海音寺潮五郎)、森田節斎(岩

崎栄、腰金つくり(片岡真)が掲載予定だった。

## 第二卷第三号 昭和十一年三月号 一日発行

(表紙)	
(広告) *注1	
(広告)	
(目次)	
(広告)	
(内表紙)	一
奥の入(会紀行) (*随筆)	布施 辰治 二―一八
実録文学読本 徳川幕府の職制と旗本生活 (*評論)	
寛政佐渡無宿送り改正 (*資料)	田村栄太郎 一九―三一、六九
実録文学 (*時評)	田村栄太郎 三二
鳶魚翁百話(一) (*随筆)	笹本 寅 三三
明治毒婦の正体 (*評論)	田村栄太郎 三四―四五
明治維新当時の花魁と大名 (*評論) *注2	伝法谷英丸 四六―六一
遊郭考(駿府二丁目)	戸川 貞雄 六二―六九
二葉亭と帝国主義―木村毅氏に答へて― (*評論)	戸川 貞雄 七〇―七三
邦人娼婦の足跡―シベリアに於ける記録― (*評論) *注3	神崎 清 七四―七六
農民騒動集 (*評論)	伝法谷英丸 七七―八一、六九
	近藤 直 八二―九八

腰金つくり (*小説)	片岡 真 九九―一〇八
森田節斎(第五回) (*小説)	岩崎 栄 一〇九―一二二
編集後記	高木 一二二

[白紙] \*注4  
[裏表紙] \*注4

### 注

- \*注1 吉川弘文館「宮内省蔵版『殉難録稿』」
- \*注2 摺筆―昭和十年十一月十九日夜―
- \*注3 摺筆―(昭和十年十二月十二日)
- \*注4 『添削本位 俳句講座』(日本俳句研究会)の広告。

## 第二卷第四号 昭和十一年四月号 一日発行

(表紙)	
(広告) *注1	
(広告)	
(目次)	
(広告)	
(内表紙)	一
首斬り浅右衛門(1) (*評論)	永島 孫一 二―三〇
奥の入(会紀行) (*随筆)	布施 辰治 三一―四三
実録文学読本(五) 徳川幕府の職制と旗本生活(五) (*評論)	田村栄太郎 四四―五九



乾窓漫筆(三) (\*随筆) 海音寺潮五郎 六〇—六四

実録資料 高崎藩へ、献金願、帯刀御免 田村栄太郎 六五

実録文学 (\*時評) 田村栄太郎 六六—六七

町人と心学 (\*評論) 田村栄太郎 六八—七二

はつか正月—法廷無罪録の一— (\*小説) <sup>※注2</sup>

長部 慶一 七三—八四

実録資料 小店員縊死事件 田村栄太郎 八五—八七

同人語 八八—八九

—いつまでも青年であれ(田村栄太郎)、洗耳翁のこと(戸川貞雄)、近頃(海音寺潮五郎)—

鳧魚翁百話(三)—「桜田門の変」— (\*随筆) 笹本 寅 九〇—九七

錢屋五兵衛 (\*小説) <sup>※注3</sup> 戸川 貞雄 九八—一〇七

間宮林蔵(一) (\*小説) 貴司 山治 一〇八—一一五

森田節齋(第六回) (\*小説) 岩崎 栄 一一六—一二五

編集後記 <sup>※注4</sup> 高木 一二六

〔広 告〕 <sup>※注5</sup>

〔裏表紙〕 <sup>※注6</sup>

### 注

\*注1 吉川弘文館「宮内省蔵版」殉難録稿

\*注2 摺筆—(一九三六・二・二三)

\*注3 摺筆—(十一年・二月作)

\*注4 「惜しむらくは、片岡の『贋金つくり』の得られなかつたことである。いよいよクライマックスに達し、片岡トタンに緊張した故である。来月号には間違ひなく掲載されるであらうと思ふ。次号を

期待されたい」とあり、本号をもって終刊する予定ではなかつた様子がかがえる。

\*注5 日本俳句研究会「添削本位 俳句講座」

\*注6 稲垣浩監督「大菩薩峠 第二編」(原作「中里介山、日活」)の広告。

### 『実録文学』について

『実録文学』は文学案内社が発行した雑誌であり、文学案内社は他に『文学案内』と『詩人』の二つの雑誌を発行していた。このうち、『文学案内』は二〇〇六年に不二出版が復刻刊行し、『詩人』も一九七九年に戦旗復刻版刊行会が復刻刊行している。しかし、『実録文学』は発行部数が少なかったせいも、復刻のみならず詳らかな先行研究も少ないため、本稿で細目を明らかにした。

『実録文学』の誌名の由来は、プロレタリア文学運動の内部で展開された文学大衆化論を引き継ぎ、貴司山治が転向期に主張した「実録文学論」にもとづいている。貴司は一九三四(昭和九年)一月に『読売新聞』へ連載した「実録文学の提唱」において、「題材の現実性」を顧慮してない大衆文学を「悪傾向の大衆文学」と呼び、それを駆逐するため、未教養な勤労大衆に向けて史実にもとづく「健全な通俗文学」を作り与えることを主張した。『実録文学』の創刊号と第二号に掲載された「実録文学研究会の趣意書」においても、特に奮物大衆小説

を史実を歪曲した「低級卑俗なる大衆小説」と規定し、そのような大衆小説を実録小説の普及によって社会的に排除すべきと主張するなど、貴司の実録文学論を引き継いでいた。

貴司の実録文学論や、それに連なる徳永直との論争については、尾崎秀樹「貴司山治論」(『大衆文学論』勁草書房、一九六五年六月)や伊藤純「プロレタリア文学と貴司山治」(ホームページ「貴司山治 net 資料館」<http://www.kisjyamaji.com>)、拙稿「蟹工船』の読めない労働者―貴司山治と徳永直の芸術大衆化論の位相―」(『立命館文学』六一四号、二〇〇九年十二月)、島木圭太「作品紹介「実録文学の提唱」―転向の時代―」(貴司山治研究会編「貴司山治研究」不二出版、二〇一一年一月)、内藤由直「貴司山治『維新前夜』と近代の超克―思想戦とアジア解放の幻―」(『フェンスレス』創刊号、二〇一三年三月)などの論考がある。また、実録文学論に呼応して『文学案内』に連載された田村栄太郎の「大衆文学のよみ方」を仔細に検討した海老原豊『文学案内』誌研究(2)―実録文学論と田村栄太郎の「大衆文学のよみかた」(『동북아 문화연구』三〇号、二〇一二年三月)、実録文学論の台湾への波及を考察した白春燕「論楊逵對 1930 年代日本文藝大衆化論述的吸收與轉化」(黎活仁・林金龍・楊宗翰編「閱讀楊逵」秀威資訊、二〇一三年三月)など発展的な研究も出始めている。しかし、雑誌『実録文学』そのものを対象にした研究は、わずかに河野至恩「雑誌『実録文学』紹介―芸術化大衆化論争から森鷗外歴史小説受容へ―」(『日本近代文学館年誌 資料探索3』二〇〇七年九月)があるのみである。河野の論考は、『実録文学』創刊に至る経緯を整理し、同人間の理念の幅を指摘するなどたいへん示唆的であるが、実録文学とプロレタリア文学や大衆文学との理論的関連性や差異については、まだ研究の

余地があるように思われる。本稿の公開により、新たな研究が促進されることを期待したい。

本総目次の作成に際しては、公益社団法人部落問題研究所蔵本、伊藤純氏(貴司山治ご子息)ほか個人蔵本を参看した。

(和田 崇)